

# あみす

雨水利用を進める市民の会  
会長 辰濃 和男  
〒131 東京都墨田区東向島1-8-1  
☎ 03-3611-0573  
FAX 03-3611-0574

「'97 雨水フェア in おきなわ」を終え

新たな一步を



「'97 雨水フェア in おきなわ」は、大きな感動を残して、8月8~9日の沖縄市民会館におけるシンポジウムや文化交流などの日程、および10日の現地視察の日程を終了しました。

「市民の会」、自治体連絡会からの参加者は、台風の到来にもかかわらず160人に達し、フェアへの出席者は延べ1200人でした。

現地沖縄からの参加者が少なかったのは、少し残念でしたが、それは、すばらしい、気迫に満ちたフェアの内容をもっと多くの人たちと共有したかったからにはかなりません。

沖縄の水事情の現状は、沖縄に身を置き、会議に参加してこそ、より良く理解できました。

辰濃会長は9日夜、打ち上げ交流会での挨拶で「今日のフェアは終着駅ではなく、今日が出発点である」と語りました。まさに、私たちは新たな一步を踏み出し、今後も常にどこかで、小さくともそこが雨水利用の始発駅になるような場所にいたいと思います。

シンポジウムの緊迫したやりとり、多良間島の人々の、素朴な雨乞い踊りの優雅さ、フォーラムおおらかな味わいのトークショウ、数々の展示品のすばらしさ、更には、皆の気持ちがひとつになって盛り上がった打ち上げ交流会——。新しい企画、若者のつどいもありました。シビアな反省もしつつ、今後の活動の糧にしていきたいと思います。



雨水貯水槽トゥージ（粟国島）

## 「'97 雨水フェア in おきなわ」宣言（抜粋）

私たちは、慢性的な水不足に悩まされている沖縄の現実の姿を再認識した。しかし、水不足は沖縄だけの問題ではない。私たちは、日本が水に恵まれ、潤沢に使えるという幻想から抜け出す時にきていることに気づくべきである。

沖縄では年間に消費される水の約25倍を上回る雨が降る。身近にある雨を利用せず、北部地域の水に依存することに何ら疑問を抱かないことに気づくべきである。雨水利用は各家庭がミニダムを建設することであり、無数のミニダムは巨大なダムに匹敵するものである。

今年を沖縄における「雨水利用元年」と位置づけ、大きな一步を踏み出そう。そのために、次のことを始める。

1. 水の循環する環境を取り戻そう。
2. 雨と共生する生活環境を取り戻そう。
3. 水源の自立を図ろう。
4. 自治体における雨水利用の政策づくりを進めよう。
5. 公的助成制度を確立しよう。
6. 水の博物館を設置しよう。

私たちは、雨水利用がこれからのが日本の水問題を左右することを確信し、それぞれの立場で雨水利用推進のための行動を始めることを高らかに宣言する。

## 基調講演 辰濃 和男 氏 (雨水利用を進める市民の会会長)

心に降る雨、心に溜まる雨水——。講演を聞きながら、そんな思いを抱きました。ゆったりとした語り口で、会長は、やはり何よりもまず、雨水利用の心を説いたように思います。

人と水との関係は長く、深い。漢字を調べると水のつく字は千字を超える。泰然自若の泰は人が水のなかでゆったりしている状態を示す。需要の需にある而は巫女の意味で、需要とは、雨を求める、雨乞いを意味する字だった。

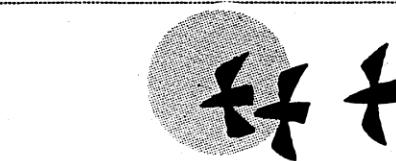
\*

\*

新屋敷幸繁さんという方の詩集を書店で手にした。ページを開いたところに「私の一日でいちばん楽しい時刻は…」と始まる詩があり、こんな一節があった。「命というものはどこにもある／その中でいちばん豊かにあるのは、水の中である」

もう一つ。「大雨だ／大きなことを考えたい／地球の音響が高まる／小さな感情は耳に来ない」

雨の音を地球の音として捉える感覚がすごい。宇宙的な規模のなかに溶けこんで生き、素直な心で雨や水のありがたさを詩にされたと思う。水に聖なる力があるという思想は日本人の心の中



にある。それをどう掘り起こすか、振り動かすかが私たちの仕事だと思う。

\* \*

都市の人口が急増している。都市の人口集中と雨水利用の運動が普及し始めたことは、セットになっている。コンクリートやクーラーの排出熱と排ガスが合体して、都市はまるで汚染ドームである。街や建物に水と緑を取り戻すことでこれを少しでも解消しようとしている。

もう一つ、明治以来、走りつづけてきて、この辺で立ち止まって、深呼吸しようということだ。コンクリートが代表する固い、近代文明の実相に疲れて、やわらかな、エコロジカルなものを求める考え方が強くなってきた。その一つの例が、雨水利用なのだと思う。 (文責・糸賀)

(辰濃会長より。フェア会場では雨の文化の面を省略したので、26日の実行委員会で、全文印刷したものを配付するそうです。ご期待ください)

### ◇◇ 8~9割の人が雨水利用を希望！ ◇◇

**シンポジウム** コーディネーター、玉城朋彦氏（琉球放送）、パネリストに宇井純氏（沖縄大学教授）、宇栄原謙氏（究建築研究所長）、大城盛俊氏（沖縄県企画開発部

・地域離島振興局長）、村瀬 誠氏（雨水利用を進める市民の会）らを迎えて、フェア1日目の午後、シンポジウムが開かれました。沖縄の水行政に対する厳しい批判や雨水利用を進めるための今後の課題について、活発な意見交換がされました。会場からの質問や意見も集中し、白熱した、内容の濃いシンポジウムとなりました。

沖縄には大きな川がなく、ダムを建設するのに適していません。にもかかわらず多くのダムが建設され、自然破壊が進行しています。

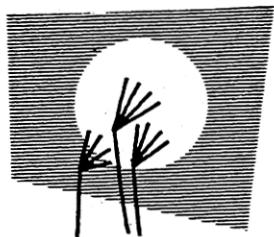
また北部にばかりダムが作られ、それを中南部の人たちが利用しているという点で、沖縄の住民の間に感情的な摩擦が生じています。これが現在の沖縄の水利用に関する問題点の一つです。

もはや北部には、新たなダムの適地はないので、これに代わる水源を早急に確保しなければならないという認識は、シンポジウムの参加者全員に共通していました。

しかし、具体的な代替水源として何を用いるとなると、宇井、宇栄原、村瀬の三氏が雨水利用を提唱したのに対し、大城氏は、水の安定確保と

いう立場から、雨水利用については消極的な態度を示し、排水を処理して再利用する方法を提案しました。

これは、天久の都市計画の中に盛り込まれているものですが、対象地域の排水を大規模に集めて浄化処理を行い、その地域で再利用しようとしているものです。



これに対して宇井氏は、水の利用は、費用と安定性の面からも、大規模なシステムにするよりもできるだけ該当地域の近くで水を確保し、その場で利用、廃水処理をするような小規模システムが望ましいという意見を述べました。この説明とし、氏は、阪神淡路大震災の時、広域にわたる水道が機能しなくなつたことを例にあげました。

村瀬氏は、廃水処理を一つの優れた技術であると評価しながらも、大量の廃棄物（汚泥）が発生するという問題点を指摘しました。

宇栄原氏は、雨水利用に関して、県民の意識は高まりつつあるという意見を述べました。実際に、設計の際にお客様に尋ねると、8～9割の人が雨水を利用したいと回答するようです。しかし、雨水タンクを設置する技術者が十分にいない等の問題もあるので、氏は、この機を捉えて、行政が率先して雨水利用を推進してほしいと要望しました。

宇井氏は、沖縄における事業が補助金に頼りきつており、資金的に大規模なものが優先され、行政が沖縄県の地域特性を自ら考えることをしていないと非難しました。

氏は、伊江島の花の栽培に、滑走路に降った雨水が利用されていることを取り上げました。

花の栽培には補助金がつかないので、自ら工夫して雨水利用が実現したが、サトウキビ栽培には

補助金がつくため、そのような工夫がされていないという説明です。沖縄の公共事業が補助金に頼る部分が大きいのが根本的な問題であるから、沖縄に補助金を交付するのをやめてはどうかという大胆な発言も見られました。

全般を通して、行政に、地域の水は自ら確保するという姿勢が欠けており、雨水利用に関しても非常に消極的だという意見が、宇井、宇栄原両氏から出され続けました。特に宇井氏からは沖縄県が補助金に依存しそぎていている点が指摘されました。

これに対して、沖縄県側は、雨水利用に積極的な姿勢を見せることなく議論は終始平行線状態でした。宇井氏が指摘するように、沖縄県が全体として、補助金に頼りきるような雰囲気になっているとすれば、一人、大城氏を責めるのも酷なよう気がしました。

行政を動かすのも人なので、今回の雨水フェアを機に、行政の中にも、雨水利用を真剣に考える人が増えて行き、雨水利用の雰囲気が高まっていくことを期待します。 (仲井圭二)



### 嘉手納基地で

雨水利用の現地調査で嘉手納基地へ行き、コザ浄水場跡を見学した。老朽化のため、5年前に廃止された施設アル、そうだ。

現在、水槽の水は抜かれていて、米軍の計らいで中を見学した。

ヘルメットを被り、一人ずつ、兵士の監視のなかをハシゴを降りていく。緊張したが、降りてみれば何のことない。からっぽの、いささか腐食した、コンクリートの箱の中にいただけ。所在なく一回りして、ハシゴを登った。

帰り際、Mさんが基地での雨水利用を語りかけると米兵も熱心に耳をかたむけていた。「わかった。上の者に伝える」と。

(M)

# 賑わい・興味津々・ポスターセッション

ポスターセッションは、発表する人と聞く人がじかに触れ合えるので、楽しいものです。

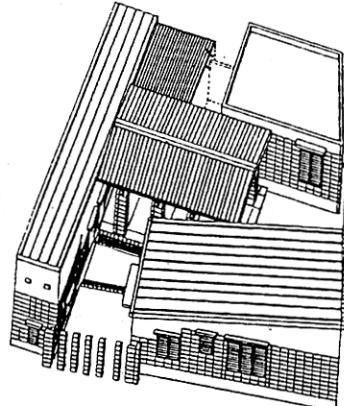
今回の提案は24件、22人の発表者が趣向をこらしたポスターの前で、集まつくる人々に説明をくりかえしていました。そのすべてを詳しく報告することは、紙面の都合上とてもできません。いずれ、『やってみよう雨水利用』のような、一冊として世に出ることを期待しましょう。

**西江 重信さん（沖縄県浦添市）**

- ◆「住宅の多目的雨水利用」
- ◆「膨大な道路空間のハイブリッド利用」

沖縄では屋根の上に上水タンクを設けている家が多い。私はこれをやめて、雨水をためるタンクを設置する運動をしたいと思っている。断水しないと水のありがたさが分からぬからだ。

また、高速道路の中央分離帯にリーラーバナリと小風力の発電施設を並べて発電したり、道路の併から雨水を取水して利用したり、道路をハイブリッドな施設として利用する案も熟慮中である。



**横山 義春さん（沖縄県東風平）（那霸市役所）**

- ◇「東風平の家（自邸）の雨水・再生水の利用システム」

私の自宅では、飲み水以外はほとんど雨水を利用している。

タンクに小動物やゴミ、あるいは空中散布の農薬が入らないように注意し、半年に一回くらい浄化槽（砂利、木炭、砂）を掃除している。タンクは24トンもあるので、今まで一度も満タンになったことがない。

また、下水は石井式合併浄化槽で浄化して、中庭の睡蓮の池の水に再利用している。小さいながらも水の循環をめざしている。

**後藤 哲志さん（沖縄大学科学実験室）**

- ◇「沖縄大学の雨水利用の試みー雨水の半永久的利用ー」

宇井先生の指導で、校舎の屋上に雨水を貯め、水洗トイレに利用している。

下水は回分式の活性汚泥法で浄化してから放流しているが、雨水が不足した場合にはこれを補給水として再利用することもある。浄化槽では、エアレーターで酸素を送り込み、または止める。この作業を一日2回に分けて繰り返すので、汚泥の発生量も少ないし、低成本である。

**ケイト・ストロネルさん（東京都杉並区）（雨水利用を進める市民の会）**

- ◆「オーストラリアのエコロジーハウス」

私の父は行政と闘いながら、一人で工夫してエコロジーハウスを作った。オーストラリアは雨が少なく、日本と同じようにダムがとても多い。ダムによる地下水位の上昇で、塩害も報告されている。一方、配管財の規制が厳しいなど、個人の雨水利用を行政は妨害している。

父の家には水道はつながっておらず、飲み水もふくめてすべて雨水を利用している。洗濯水などの排水もトイレの流し水に使用しており、水の循環利用が徹底されている。（文責・宮村）

## 雨の音楽祭・展示・交流の夕べ

▽8日、自治体連絡会と平行して行われた雨の音楽祭には、現地沖縄から3団体と東京から「花しようぶ」が出演しました。音楽、歌、踊りを味わい、心豊かになる時を過ごしました。

琉球のユシャイノー節で、琉歌部門の最優秀作品「あたら雨水ゆ ただ流れちなゆみ 天からの授き 肝に染みて」を合唱したのは、とてもすばらしかったです。花しょうぶの演奏も迫力がありました。市民の会のメンバーによって、雨水音頭も披露することができました。

沖縄市民会館の中ホールは、展示会場となりました。ひときわ目をひいたのが、雨乞いのパネルです。天に登る龍の姿が美しく、説明文も分かりやすく、見る人に雨水の大切さを改めて思わせる作品でした。

雨水コンテストの応募作品も展示されていました。昨年までの実践部門、アイティア部門、川柳部門に琉歌部門が加わり、さらに賑やかでした。

▽9日、宣言採択の後の「交流の夕べ」は、この2日間の疲れも吹き飛ぶほどの盛り上がりをみました。

まず、琉球の踊りと音楽。次から次へとさまざまな踊り、音楽が繰り広げられ、堪能しました。雨水音頭の輪も広がりました。

そして、辰濃会長、新川沖縄市長のお話を聞き「雨水フェア in おきなわ」は終わるけれども、これをきっかけに雨水利用をさらに広めていこうということを確認しあいました。 (小久保)



### 玉水の縁をとこしえに —

'97雨水フェア in おきなわ 現地事務局長 伊礼 弘

'97雨水フェア in おきなわ'は、県内各界に大きな成果を残して無事終了することができました。

墨田区の雨水利用を進める市民の会が沖縄の雨水利用に投じた一石は、沖縄の雨水利用の将来に大きなインパクトを与えてくれました。

諸般の事情で、開催実行委員会は3月末の発足8月開催という極めて短期決戦となりました。

関係者との連携作業は、意思の疎通がうまくいかず精神的にも厳しいものがありましたが、大きな事故もなくフェアを終えることができました。

フェア動員については、本部事務局と一緒に対策を練ってみましたが、台風との関係があったとはいえ、多くの皆さまに会場まで足を運んでもらうことができず、現地事務局として深く責任を感じ

ております。

しかし、シンポジウムにおけるパネリスト間の討論や、フロアからの熱い発言、そして市民フォーラムの中身が濃いものになったことなど、総じて今後の沖縄における雨水利用につながるフェア内容との評価をいただいていることで、お許しを得たいと思います。

現地事務局として、皆さま方の受け入れや準備等に不手際があったことだと思います。この場をお借りして深くお詫び申し上げます。

今後とも沖縄県の雨水利用推進のため、貴会のご指導とご鞭撻をお願い申し上げますと共に、玉水の縁がいつまでも続くことをお祈り致します。

## 自治体連絡会の 新たな展開

◆ 上林 裕子

「雨水フェア in おきなわ」の一環として8日「雨水利用自治体担当者連絡会」が開催された。

私達市民の会のように、雨水利用に関心があつたり、自分たちで実践している者にとっては雨水利用は当たり前のことに思えるが、まだまだ知らない人が多いことを考えると、自治体が率先して雨水利用を進めることの意義は大きい。しかし、自治体の取り組みを見ると、自治体の中の関心・意識のある人が孤軍奮闘していると言うのが実態だ。

こうした自治体の情報交換と技術交流のために昨年、雨水利用自治体担当者連絡会ができたことは、雨水利用の輪を広げていく上で心強いことである。

参加団体もこの1年で80に増え、今回初めて沖縄での開催となった。沖縄県内で連絡会に参加しているのは、沖縄県、那覇市、沖縄市、など5自治体だが、この日の会議には県内の自治体も多数参加した。

「自治体に雨水利用政策の確立を」をテーマに行われたこの日の会議は4つの自治体がそれぞれの取り組みを発表したが、沖縄市の取り組みは自治体の持つ力と、何ができるかという点を考える上で大きなヒントを与えてくれた。

仲宗根健昌・沖縄市水道局長は「7年間雨水利用・井戸水利用者を表彰してきたが、水を売るべき水道局が、なぜ後向きに事業するのかという批判を受けてきた。人々は屋根の上に水タンクをつけ、給水制限しても余計水をつかう状況で自分さ

えよければと考える。沖縄市は県企業局から水を買って売っているわけで水源には関与しないが、では、北部ヤンバルの水源に思いを致さなくてよいのか。

確かに水を売る水道局が雨水・井戸水等の利用を推進すれば自分の首を締めることになる。しかし、井戸水・雨水の利用は節水につながると考え推進してきた」と語った。

参加者からは「水道局の仕事ではなく、土木・建設がやるべきでは」との意見も出た。

しかし、そうなのだろうか。

節水とは水道水の利用を節約することではなく、ある水を大切に考え、使うことであるはずだ。「井戸水保全条例を作りたい」という仲宗根局長の言葉に「玉水（たまみじ）」を大切にする沖縄人の心を感じた。こうした行政マンの輪が広がることを期待したい。

自治体連絡会は、来年8月墨田区で、「雨水利用自治体サミット」を開催することを決め閉会した。

### “台風にも負けず”

8月7日、沖縄を台風11号が訪問し、腰をすえていた。羽田発の午前の便は欠航になったまま、ロビーで70人近くが待機した。皆、いらだつこともなく、おしゃべりを楽しんでいる様子。「もののけ姫」を観にいこうか、という時間有効活用派もあらわれた。

そのうち、臨時便が出ることになったが、情報が混乱し、旅行社のオニイサンもへとへとで、あやしげな様子だった。

全員、あす朝の1便で、と決まりかけたとき、いつも物静かなKさんが「どうしても今日中にいかなきゃならないの」と、理屈ではなく、心から訴えた。へとへとのオニイサンはさらに奔走し、ナントナント、夜の臨時便に、全員乗ることができたのでした。Kさんありがとう。

(仲)

# 雨水フェア

in メディア

鈴木 陽子

「'97 雨水フェアinおきなわ」の成功には、メディアの大きな支援があったことも忘れる事はできません。特に地元の二大新聞である沖縄タイムスと琉球新報は、連日、相当な紙面をさいて、フェアの案内や当日のディスカッションの内容を報道しました。

会期前日7日の沖縄タイムス朝刊には、雨水利用コンテストの実践部門で優秀賞を受賞した安里恵伸さんが自宅につくった"雨水の池"が大きな写真入りで紹介されました。また、同じ紙面では沖縄県雨水利用を進める市民の会会長の吉田朝啓さんが、「横の水から縦の水へ」と題するエッセイの中で、「遠くの水源から莫大な金をかけて送られてくる水道水に頼り過ぎず、天から自分の上に降ってくる縦の水、雨水を大切にしよう」と訴えました。

8月9日の沖縄タイムスの社会面の見開き2ページには、「雨多いのになぜ断水。行政に注文相

次ぐ」という大見出しで、基調講演と、玉水シンポジウムの白熱した討論についての詳しい報告が掲載されました。

さらに、翌週13日の日経新聞は、社説で沖縄のフェアを取り上げ、全国の読者に、「雨水をもっと利用しよう」と呼びかけました。その中から一部を抜粋すると、

「……家庭での水道使用量は年々増えている。今年は、今のところ全国的に渴水の恐れは少ない」とあって、節水に対する関心が薄れがちだ。…水不足への備えは平時こそ大事である。…先週、沖縄市で開いた『雨水フェア』は『雨水利用は各家庭がミニダムを建設することであり、無数のミニダムは巨大なダムに匹敵する』という宣言を採用した。雨水利用の輪をさらに広げよう」。

また、8月末には、琉球放送テレビで、フェア当日にビデオ上映された"雨の道"を組み込んで、1時間30分の特別番組で放送されました。

## ホームページ

### 開設のお知らせ

お待たせしました！ このたび、やっと、市民の会のホームページを開設することになりました アドレスは、次のとおりです。

[http://www.network.  
sumida.tokyo.jp/  
amamiz/](http://www.network.sumida.tokyo.jp/~amamiz/)

\*

市民の会への入会案内、国内外の雨水利用の紹介、雨水利用Q&A、「雨水の日」のアピールなど、内容は盛り沢山！

一度、アクセスしてみてください。

情報部会 市川 龍

## 雨水、おいしかった

北部コースのエキスカーション。20人位のグループで瀬底島へ行った。「ああ、沖縄だな」と改めて思うほど、気持ちが落ちつく島だった。

雨水を飲んだ。皆、口々に「おいしい」とつぶやく。このお宅には、庭先にコンクリートでできた雨水貯水槽があり、蛇口から雨水が出てくるようになっていた。

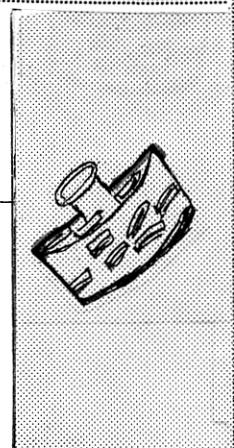
米寿のお祝いをしているお宅で山羊汁をごちそうになった。すこし、臭みがつよい。皆、お腹がすいていたわりには、あまり食べなかったようである。コンブの煮物はとてもおいしかった。

このお宅の庭の片隅に、深さ50センチほどの小さな池のような雨水貯水槽があった。昔、周囲の木から取水して使ったのだという。 (c)

# わたしの'97雨水フェア in おきなわ

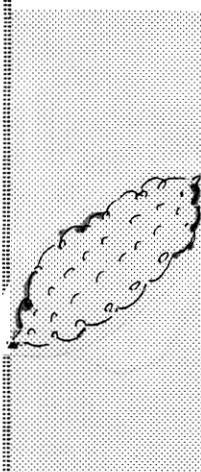
◆渡辺 隆子さん（小金井市） 実行委員の皆さんお疲れさまでした。

ひとつの形にとらわれず、いつも楽しみながらアイディアを出し合っているのを見ると、現在の市民活動の見本になっているな、と感じます。これからもスマートで実力のある活動を続けていってください。



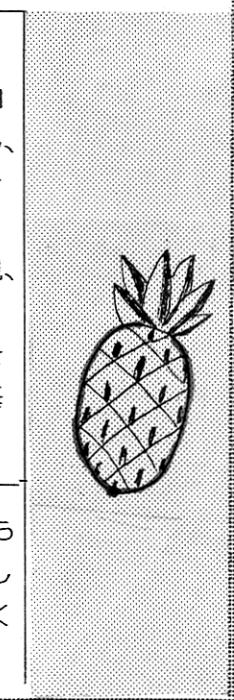
◆南 昌子さん（鎌ヶ谷市） 娘二人と参加しました。台風のため、一日遅れの出発となりましたが、本土とは違う沖縄を、まるごと楽しめました。

現地視察では、電気を大量に使う海水淡水化施設に驚き、瀬底島でのゆつたりした時間の流れの中、昔からの雨水槽を見て、味わって、『雨水利用は地球を救う』を実感しました。



◆ケイト・ストロネルさん（杉並区） 沖縄の踊りなどはすごかった。特に太鼓の演奏はとても強いエネルギーを感じました。本題については、沖縄の人とディスカッションする機会があまりなかった。今後は、一般の、なるべく多くの人が発言やディスカッションをし、何かを創造できるような、たとえばワークショップなどをプログラムに入れていくことを提案します。

◆小沢 一昭さん（甲府市） 台風のため、さんざん待って、やっと行った沖縄。雨の多いはずの所に、水不足で、北原（やんばる）に多くのダムを作る沖縄。昔から、命の水として、水源として雨水を使ってきた沖縄。雨の文化、水の大切さ、人のつながりを感じた沖縄でした。



◆笠井 慶子さん（江東区） 龍神さまの大歓迎をうけて、翌日、やっとの思いで着いたフェア会場。野点の「ふくふく茶」でのどを潤す。おおらかさと繊細さの、不思議なハーモニー。「う~ん、おいしい！」。会場内では議論白熱し、その後は、雨水音楽祭。琉球舞踊の、衣装の華やかさとは対照的な、抑えのきいた動きが印象に残った。3日目の現地視察は南部コースに参加した。

嘉手納基地見学に始まり、平和の礎まで。戦争を考え、雨水利用の実際を見、琉球王国の歴史に思いを馳せ、自然のみごとな「芸術」も堪能した。4日目。帰路へ。ウチナーのはにかむような微笑みと、祭りにかけるエネルギーと、その裏にある本土への複雑な思い。米兵の陽気で気さくな笑顔と、広大すぎる基地、軍用地。さまざまな思いを心に残して、飛行機は軽々と飛び立った。

◆住谷由貴子さん（三郷市） 雨水フェア初日のシンポジウムでは、あくまでも大規模工事に固執する県の幹部に、バネラーや会場から厳しい批判がとびました。宇井純氏の「補助金に頼るな」「集中型ではなく、分散したシステムづくりを」という主張が印象的でした。